

未来へ

登米市立米山中学校

二年 後藤優里奈

平成二十三年三月十一日から二年六ヶ月が過ぎようとしています。

あの日、多くの人々の命や町が失われました。けれども、地震や津波によって奪われた町には人が戻り生活し始めています。世界中からの支援や、多くの方々への支えがあり、私達被災者は今を生きています。

私は震災後、家の都合で南三陸町立志津川中学校から登米市立米山中学校に転校してきました。あの震災があつて変わってしまったことはたくさんあります。しかし、くよくよしていたら前に進むことはできない、と気持ちを切り換え、前に進むことが大切だと思ふようになりました。もちろん、あの日のことを忘れないことも大事です。だから町の復興だけではなく、私自身が心を復興させるための努力をしていかなければならない、と考えるようになりました。

震災後の学校生活は、一ヶ月遅れでスタートしました。もちろん以前通っていた校舎ではありません。再開は、登米公民館で避難所生活を送り、南方の仮設住宅に移り、学校そのものに懐かしさを感じ始めた頃でした。米山町の元の善王寺小学校を借りての戸倉小学校の再開です。場所は違つても小学校最後の一年を迎えることができ、また友達と机を並べる生活が始められる喜びは、うまく言葉に言い表せるものではありませんでした。勉強の方は多少の遅れはありましたが、少しずつ学校に慣れるうちに勉強にも集中できるようになりました。そして卒業を迎え、今度は片道一時間をかけた志津川中学校への通学です。「こんなはずではなかった」ということが現実起こってしまったけれど、環境が変わつても頑張つていけそうな気持ちになれたこと、これは自分自身の「復興」でした。震災で大切な人を亡くした人々や亡くなった人のことを考えると、いろ

いろいろなことが思い出され胸がいっぱいになり、今の私がどれほど恵まれていたかを感じずにはいられません。けれども、この先、私も苦しい時やつらい時が何度も何度もあると思います。そのたびに私は家族や周りの人たちと助け合い、声を掛け合って一緒に乗り越えていくことができると思います。そのためにも、多くの人が取り合う手のひとつに私もなれたらと思います。

私達は世界中の皆さんに支援していただきました。制服・通学用のかばん・文房具、他にもいろいろなものを手にし、「普通」に学校に通い、「普通」に生活でき始めています。私も支援していただいたたくさんの方への恩返しの意味も込めて、私が生きていることが人の役に立てたらいいなあと考えます。

私は、この震災のこと、それによって経験したこと、震災を通して学んだことをいつまでも忘れないでいようと思っています。津波や地震の恐ろしさや命のことを胸に、志津川の海を見ながら毎日暮らしている別れてきた友達、そして米山中学校でできた新しい友達とともに、私は自分の未来に向かって力強く生きていきたいと思っています。